

2007 2006年度コスモ石油エコカード基金活動報告書 第5期:2006年4月1日~2007年3月31日



秦嶺山脈に棲むキンシコウの親子

【秦嶺山脈 森林・生態系回復プロジェクト】

植林を通して 野生動物の生息環境改善に 取り組んでいます

過去2年間で15,000本の植林と生態系回復の観察を続けてきました。

秦嶺山脈は、中国の古都、西安市から南西に200~400kmほど離れた場所に位置し、中国南北の分水嶺となっています。同山脈は約1,500kmにわたりそびえ立ち、同山脈北部の黄土高原付近は年間降水量が700mm程度とされています。日本よりも乾燥地域で、水資源豊かな沿海部とは景観はもとより、その影響は経済活動にまで及んでいます。コスモ石油エコカード基金では、2005年度から植林活動を開始し、過去2年間で15,000本の植林を行い、生態系改善状況の観察を続けております。

森林伐採事件が発生しましたが、西北大学の迅速な対処が解決の道すじとなりました。

順調に継続してきたプロジェクトですが、2006年8月に西北大学が2,000本の樹木の不法伐採を中国陝西省で確認しました。これらは、地元の金鉞開発会社の伐採が原因でした。しかし、西北大学が迅速に調査団を派遣し、省政府と協議した結果、陝西省・金鉞開発会社・西北大学が6,000本の森林回復に合意し、現地関係者も厳重に処分されました。同事件に対しては、中国国内からの好意的な意見が多く、結果的に中国の環境保全意識の向上になったと西北大学から報告を頂きました。



林道跡地に植林している様子



植林サイトの麓に設置している活動紹介の掲示板





「ずっと地球で暮らそう。」 プロジェクト

「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトは、
コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」会員やコスモ・ザ・カード「エコ」会員の皆さまとともに、
NGO/NPO・地域社会・政府の方々と一緒に取り組んでいる地球環境貢献活動です。
「ずっと地球で暮らそう。」の合言葉には、
私たちが暮らす美しく豊かな地球をずっと残していきたいといった願いが込められています。

message

「ずっと地球で暮らそう。」この合言葉の実現をめざし、美しい地球を残していきたいという願いから、地球環境貢献活動「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトは、2002年に開始し、今年、6年目を迎えることができました。これは「地球のために何かをしたい」といった約86,000名のコスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」会員やコスモ・ザ・カード「エコ」会員の皆さまに支えられているからです。本当にありがとうございます。

「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトは、これまで2つのことを大切に、活動を展開して参りました。

1つは、コスモ石油エコカード基金のスタッフ自らが現地に足を運び、継続的にプロジェクトを推進するNGO/NPOなどプロジェクトパートナーをはじめとした現地の人たちと直接話し合い、私たちが感じたことを自らの言葉で世の中にお伝えしていくことです。なぜなら、現地を訪れて得られた体験や情報は、かけがえのない貴重な財産であり、たくさんの方々に共感を持ってもらえると信じているからです。

そしてもう1つは、地球規模で発生している環境問題の深刻な実態を、ありのまま広く伝え、環境保全や環境教育の環を広げていくことです。「エコ」会員の皆さまとともに、企業・NGO/NPO・政府が三位一体となり、それぞれの強みをいかすことで、地球にとってより大きな力となると確信しています。

2007年度は、会員の皆さまにも、国内を中心にプロジェクトに参加頂ける機会を増やしていく計画ですので、是非、ご参加ください。

最後に、私たちと同じ想いを共有し、「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトをご支持頂いている会員の皆さまに、心から御礼を申し上げますとともに、これからも、引き続き、ご協力とご支援を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。

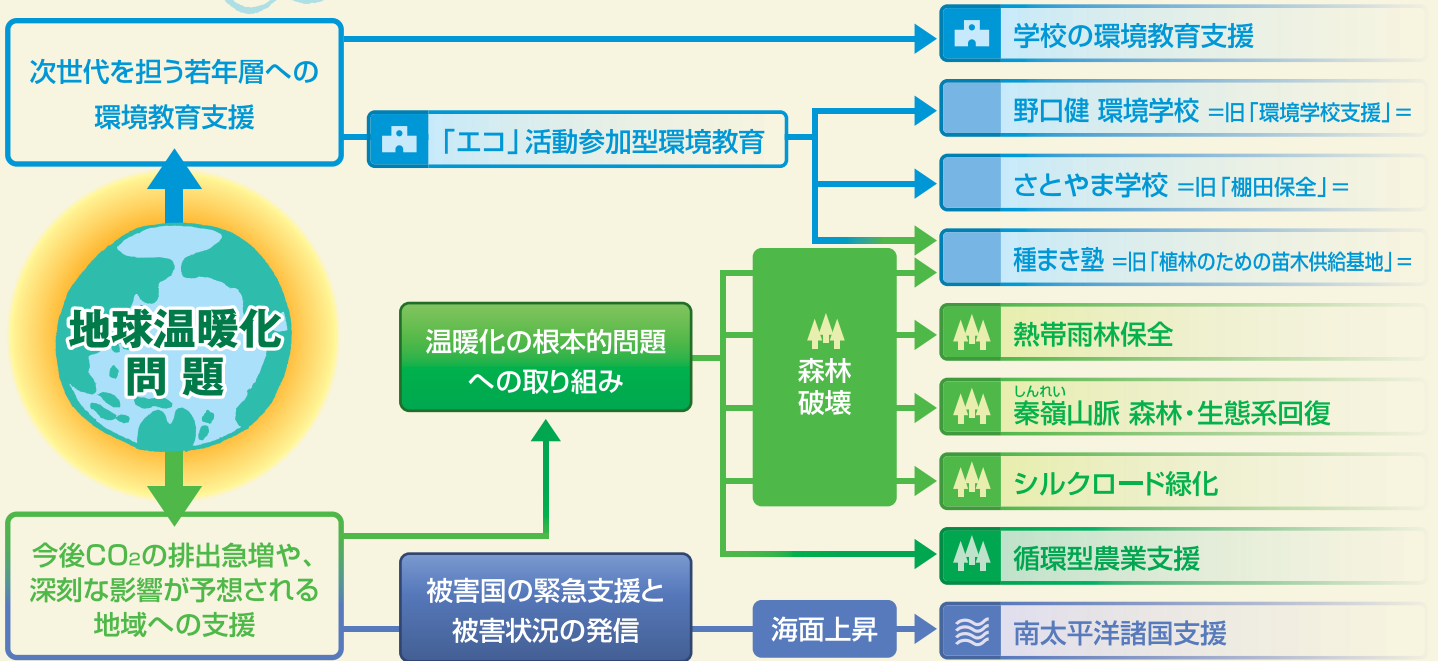


コスモ石油エコカード基金
理事長 近藤 直正

収支報告



project 2007



持続可能な社会の実現

【プロジェクトのコンセプト】

「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトは、この合言葉に象徴される「持続可能な社会（地球）の実現と発展」をめざしています。石油と最も関わるの深い環境問題「地球温暖化の防止」を中心に、環境問題にも密接に関係している課題「貧困」「食糧難」「開発」「生産/消費形態」「教育」など、本質的な問題解決に繋がるアプローチを重視しています。

2006年度の活動トピックス



NPO法人 Tuvalu Overview
遠藤代表

ツバルにおける地球温暖化の被害

会員の皆さまに、ツバルで起こっている地球温暖化の深刻な被害状況をご報告いたします。

近年、ツバルでは海面上昇の被害が顕在化しています。まず目に付くのは海岸線の浸食です。上昇し続ける波が島を削っています。10年で20mも浸食されたところもあります。満潮時に海水が島の低地に流入して起こる塩害も深刻です。地下水は海水によって塩水化し、タロイモ畑の塩害も引き起こしています。塩害は食生活へも影響を与えました。今では生活用水のほとんどを雨水に頼り、主食もタロイモから米食に変わりました。米の輸入は他の消費材の輸入

を加速させ、缶、ビン、ペットボトルなどの工業生産品が増加し、首都の島の北端には処理できないゴミの山ができています。消費社会・貨幣経済といった先進国の文明が、本来ツバル人が持ち合わせていた豊かな人間性を失わせつつあることとても皮肉なことです。

ツバル人の中には、海外へ移住することを希望する人もいます。唯一労働力としての受け入れを行っているニュージーランドの移住条件は、ツバル人にとってハードルが高く、その願いは簡単に叶うものではありません。ツバルでは、地球温暖化の問題がそこに住む人たちの将来を左右する事態にまでなっているのです。

コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」



コスモ・ザ・カード「エコ」

コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」、コスモ・ザ・カード「エコ」は、「地球のために何かしたい」という思いを実現するための、どなたでも参加できるカードです。

コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」、コスモ・ザ・カード「エコ」はお客様から毎年お預かりする500円とコスモ石油からの寄付金を、環境保全活動を行うNPOや公益法人などに寄付することで、その活動をサポートしていきます。

コスモ・ザ・カード・オーパス「エコ」
コスモ・ザ・カード「エコ」
会員の皆さまからの寄付
入会后、及び次年度以降の入会月に
500円のご寄付をお預かりします



コスモ石油
グループの寄付

地球環境保全をサポートする
「ずっと地球で暮らそう。」
プロジェクトを運営

8 Projects

【「エコ」活動ファイル2006】

マークの凡例
地域開発
環境教育

シルクロード緑化プロジェクト

拡大する砂漠化の緩和と地域の方々による持続的な発展をめざし、継続的な植林活動を展開します。

果てしない乾燥地帯が広がる中国シルクロード上の黄土高原では、砂漠化により着実に新たな土地が侵食されています。地域の方々によると、以前は陝西省西安市付近から新疆ウイグル自治区まで緑が広がっていたといわれています。しかし、時間が経つにつれて、生活のために人が木を伐採したことが砂漠化の拡大につながったといわれ、コスモ石油エコカード基金ではNPO2050とともに、2002年度から植林を続けています。

2006年度の活動

沙棘(サジ)を主体とした植林20,000本を引き続き行ないました。2007年度は中国国内の植林地の視察や沙棘の実に加工工場との商談も行ない、沙棘植林と貧困軽減の相乗効果の実現を図る計画を練りました。甘肅省や新疆ウイグル自治区で沙棘植林の推進とネットワーク作りも強化し、砂漠化防止を目的として活動を進めました。

今後の活動

2006年度に開始した甘肅省で2007年度は40haに沙棘を植林します。12万本の沙棘植林を通し、黄土高原の砂漠化防止などを実現していきます。更に現地地域の方々に植林とその後の管理一切を付託し、環境意識や収入の向上、貧困解消に寄与します。

中国 秦嶺山脈 森林・生態系回復プロジェクト

森を分断する林道跡地に植林し、絶滅危惧種キンシコウなど、野生動物の生息環境改善に取り組んでいます。

秦嶺山脈は、パンダやキンシコウ(絶滅危惧種)などの希少動物の宝庫として世界的にも有名です。しかし、20世紀後半の森林伐採により、野生動物の住む森は荒れ、種の絶滅が危ぶまれるようになりました。このプロジェクトでは、豊かな森林と生態系の回復をめざし、環境を最も崩しているといわれる林道跡地への植林(全長194kmのうち72.5km)と、動物の観測に取り組んでいます。

2006年度の活動

2年目の2006年度は、秦嶺山脈の西側の斜面にある林道跡地18kmに、9,000本の植林をし、この2年間で予定地の約半分の植林を終了しました。植林には西北大学の学生280名が参加し、地元の方や村民も協力してくれました。パートナーの西北大学では中国国内で講演会を開催し、また、ホームページを開設するなど、活動の紹介やPRも積極的に行ないました。

今後の活動

2007年度は16kmの林道跡地に合計12,000本を植林する予定です。植林と並行して、キンシコウやパンダ、また他の野生動物の植林への適応状況や、生存能力などの研究も続けていきます。

循環型農業支援プロジェクト

キャッサバ植栽やエリ養蚕などを通じた持続的な地域社会の構築や地場産業の育成をめざします。

フィリピン南西部のパラワン島は緑豊かな島であるとともに、同国の中でも最も開発が遅れた地域といわれています。その地域の農民や漁民の方々の多くは、生活の糧を得るため、森林伐採や焼畑農業に従事し、生活を営んでいます。そのような状況のもと、NPO2050とともに、パラワン島の首府エルトプリンセサで活動するタバライ財団と、キャッサバ植栽やエリ養蚕を通じた環境保全活動を展開しています。

2006年度の活動

活動拠点のエルトプリンセサとポートバートンで、引き続きエリ養蚕等の技術指導に取り組みました。トレーナーの中には、自宅でのエリ養蚕やキャッサバ植栽をする方々も現れ、着実に技術の向上がみられました。2005年度に活動を始めたカヤサン村では、リーダー不在となり一旦活動を断念しましたが、一方で現地のニーズを受けてサンカルロスやナラで技術指導を始めました。

今後の活動

今までの技術指導と地機(じばた)の提供により、技術レベルが格段に高くなってきています。2007年度は、輸出品の生産を目的とした品質管理とマーケティングが主な課題です。新規サイトのサンカルロス・ナラ・サバンではキャッサバ植栽やエリ養蚕を中心に初歩的な指導を継続的に行ないます。

植林のための苗木供給基地プロジェクト(新「種まき塾」)

“ココロと大地にタネを蒔く”をスローガンに、自然林の回復活動を通し、環境教育に取り組んでいます。

物事の始まりであり、同時に「循環」の象徴といえる「タネ」に注目し、自然循環する森林づくりと環境教育に取り組んでいます。山からタネや実生を採取し、これを苗畑で育て、地域で植林する方々に提供します。また苗木育成や植林活動を通して、五感で“自然”を感じ、人と自然が楽しく共生できる方法を考える環境教育プログラムを実施しています。

2年目の今年の目標は、「苗畑での育苗本数50,000本」「苗木提供数 5,000本(将来目標年間1万本!)」です。また、引き続き、体験プログラム(6~10月)や、エコツアーも開催する予定です。ご案内は順次ホームページにアップしていきますので、是非ご覧ください。

このまま植えられる「紙ネット」(厚紙でつくられた苗木ポット)

2006年度の活動

2006年春にスタートしたこのプロジェクトでは、まず、拠点となる苗畑1haの造成から活動を開始。アカエゾマツ13,200本、ハルニエ9,600本など、計33,650本の苗木の育成に着手し、5,000本を植林用に供給しました。また、どなたでも参加可能な体験プログラムをスタート。6月末には「エコ」カード会員限定のエコツアーも行ないました。

今後の活動

2年目の今年の目標は、「苗畑での育苗本数50,000本」「苗木提供数 5,000本(将来目標年間1万本!)」です。また、引き続き、体験プログラム(6~10月)や、エコツアーも開催する予定です。ご案内は順次ホームページにアップしていきますので、是非ご覧ください。

学校の環境教育支援プロジェクト

日本各地のNPOとともに、教育の現場、「学校」での環境教育を支援しています。

教育最前線の「学校」の環境教育のお手伝いをする、それがこのプロジェクトの目的です。自然体験プログラムなどのノウハウを持つ日本各地のNPOと、ノウハウや機会を探している学校とのマッチングを行ない、互いの長所を生かして、より効果的な環境教育プログラムができるよう取り組んでいます。また、ウェブを活用した環境学習サイト「EE kids」を通じ、環境教育のコミュニケーションプラットフォーム作りも行っています。

2006年度の活動

2006年度は全国7地区、北海道、千葉県、東京都、神奈川県、三重県、広島県、鹿児島県の小学校10校を支援。千葉県と三重県ではエネルギー教育も行ないました。WEBサイト「EE kids」も軌道に乗り、児童、教師、NPO、地域の方々でコミュニケーションをはかり、体験学習で実践したことを発展させ、疑問点や意見交換を活発に行なうことができました。

今後の活動

2007年度は北海道、宮城県、埼玉県、東京都、岐阜県、広島県、高知県、熊本県、鹿児島県の9ヶ所の小・中学校を支援。新たに、先生方へのノウハウ伝授ツール「ティーチャーズ・ガイド」の制作や、各地の取り組みを発表するフォーラムの開催も予定しています。

環境学校支援プロジェクト(新「野口健 環境学校」)

環境に対し自ら行動できる「環境メッセージ」の育成を支援しています。

「自分から環境に対して行動メッセージを発信できる人“環境メッセージ”を育てていきたい」。そんな思いから野口健さん率いるNPOとともに「環境学校」を開催しています。環境学校では自然の美しさや楽しさを体験し、環境保全のありかたや、背景にある社会問題も学びます。また、課題などについて自分の意見を発表する機会を通じ、「環境メッセージ」の育成に取り組んでいます。

2006年度の活動

環境学校を富士山・佐渡・東京・小笠原の全国4ヶ所で行ないました。自然に親しみ体感しながら、参加者自らが感じ、考え、社会に向けてメッセージを発信します。富士山では新たな試みとして、家族を対象とした環境学校を開催し、大人と子どもと一緒に環境に触れる機会ができました。

開催地	日程	参加者数	メインテーマ
富士山	7月24日~7月27日	23名	富士山の不法投棄の現状について
佐渡	8月14日~8月16日	12名	トキ放鳥の佐渡の取り組みについて
富士山(家族対象)	9月16日~18日	24名	富士山の不法投棄の現状について 家族が富士山でできること、家庭で出来ること
東京	12月16日~17日	46名	企業の環境活動(エコプロダクツ展等) 環境メッセージの輪
小笠原	3月21日~26日	24名	エコツアーと環境は守れるのか? 生物多様性の保護

今後の活動

2007年度は富士山、佐渡、小笠原の3ヶ所で児童、青年を対象に、環境学校を実施します。子どもたちが自ら行なう環境活動を促進し、その活動を発表の場として「ミーティング」も開催します。毎年12月には環境学校卒業生が集まり、宿題の発表の場としています。

南太平洋諸国支援プロジェクト

気候変動の影響といわれる海面上昇により、被害を受けている地域や人々を支援しています。

南太平洋のキリバスやツバルは、海面上昇の影響を、真っ先に受けているといわれる島嶼国です。高いところでも海拔高が数mに満たない南国では、海水で道路が冠水したり、井戸に海水が侵入したりして、そこに住む方々の生活に支障が出はじめています。場所によっては、海岸浸食が深刻なところもあるなど、地球温暖化による海面上昇の影響が目前に迫っています。

2006年度の活動

マングロープに関する試験活動を通じて、関係機関の担当者への技術移転を行ないました。比較的波の影響を受けやすい立地条件でも、植栽したマングロープが流されないような有効な植栽方法を模索し続けています。また、地域の子どもたちや青年たちも、積極的にマングロープの植林活動に参加しはじめ、身近な自然のおもしろさや大切さを学ぶ機会が少しずつ高まりつつあります。

マングロープの種子を採取している様子

今後の活動

マングロープの植林を2007年度も引き続き行ない、キリバス住民へのマングロープ植林技術の移転ばかりではなく、普及啓発活動を通じての環境意識の醸成にも取り組めます。海岸浸食や沿岸域での気象災害(高波等)による被害を可能な限り緩和し、住民の生活の保障に多少でも貢献できたらと考えています。

2006年度の活動

給水車を設置した前年度の緊急的支援に加え、海岸浸食の抑制効果が期待できるとされるマングロープの植林に向けた準備をはじめました。現地にマングロープ専門家が出向き、海岸線の浸食状況、マングロープ植林に向けたの採種可能な樹種の有無、採種場所や植栽可能な場所の選定などの調査を実施しました。

今後の活動

2007年度は小さな面積ですがマングロープ植林活動を開始します。夏季に植林事業の記念式典を予定しております。首都フナフチでは、会員の皆さまから支援頂いた給水車が連日休みなく稼働していますが、島内にはひび割れなどで水を補給できない水タンクが多数あり、それらの補修も実施します。

パプアニューギニア Papua New Guinea

熱帯雨林保全プロジェクト

熱帯雨林の保全と人々の生活向上をめざし、循環型有機農業の普及を支援しています。

パプアニューギニアやソロモン諸島は、熱帯雨林の広がる自然豊かな地域ですが、人口増加や、急激な近代化に伴い、食糧増産や現金収入の必要性が高まっています。そのため、焼畑の拡大や商業伐採により、自然の再生スピードを越える熱帯雨林の破壊が進んでいます。熱帯雨林の保全と、貧困に起因する諸問題の根本的な原因解消を目的とし、自然環境と折り合った持続可能な循環型の有機農業普及活動を行なっています。

2006年度の活動

モデル研修農場「エコテックセンター」で、定地型の有機農業研修を通じ、人材育成と農業技術の普及を行ないました。長い視野で、森林伐採防止や環境保全に繋がる動きを信じ、活動を続けています。また、新たな活動として環境に関する啓発を目的に、地域の中心部であるココボで「ココボ自然環境公園」構想を開始しました。州政府とのマスタープランも決定し、建設に着手しました。

今後の活動

モデル研修農場「エコテックセンター」では、定地型有機農業をはじめ、自家製チョコレートの製造やスタッフの能力開発研修、市場開拓・マーケティング調査を行ない、自立運営をめざします。また、建設が遅れていた環境啓発のための「ココボ自然環境公園」が2007年度開所予定となります。

キリバス共和国 Republic of Kiribati

ツバル Tuvalu

ソロモン諸島 Solomon Islands

2006年度の活動

「バーマカルチャーセンター」では、宿舎や長期研修プログラムが完成し、遠方からの研修生受け入れ体制も整いました。研修生は2期生20名が卒業し、3期生30名を迎えました。また、新たな試みとして、「ソロモンオーガニックセンター」を開所。卒業生や農民の自活をサポートするため、収穫した農産物を買取り、販売する流通システムの確立をめざしています。

今後の活動

「バーマカルチャーセンター」では人材育成に注力し、現地インストラクターを日本に招聘し、技術を伝授し、スキルアップを図ります。また、2006年度に開所した「ソロモンオーガニックセンター」を本格稼働させるように、卒業生出身の村落を対象に農作物流通をめざしたシステム構築を行ないます。



稲作前の整地作業



ココボ自然環境公園で植樹した苗木の管理作業をするスタッフ



ココボ自然環境公園で植樹した苗木の管理作業をするスタッフ



稲作前の整地作業



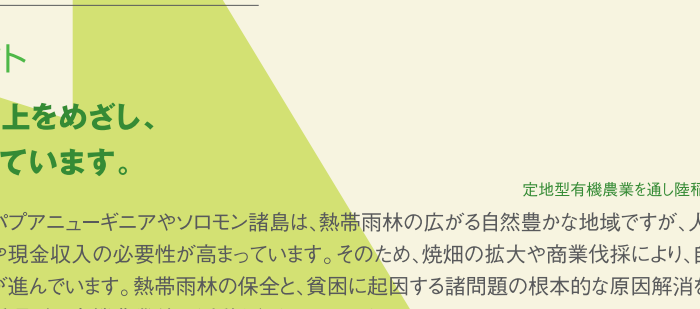
ココボ自然環境公園で育苗予定の木登りカンガルー



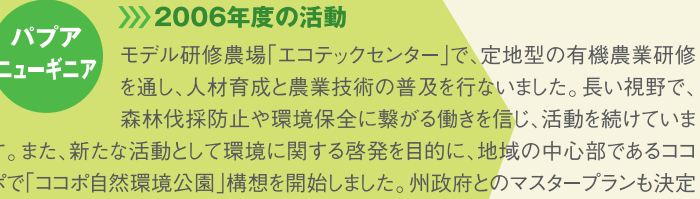
ココボ自然環境公園で植樹した苗木の管理作業をするスタッフ



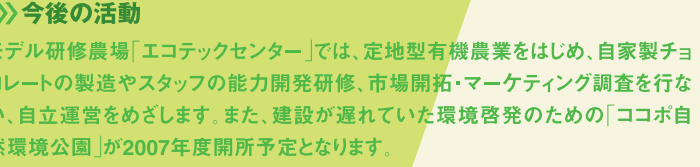
稲作前の整地作業



定地型有機農業を通じ施設栽培している風景



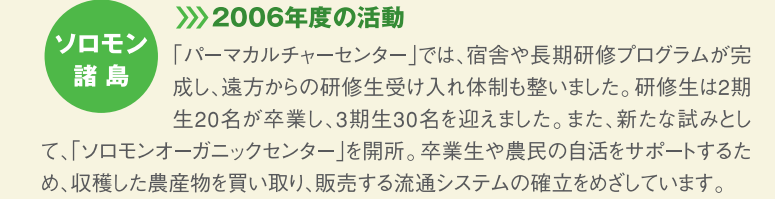
ココボ自然環境公園で植樹した苗木の管理作業をするスタッフ



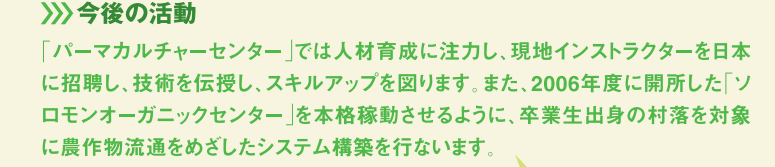
稲作前の整地作業



新設のソロモンオーガニックセンターで数談する様子



ソロモンオーガニックセンターの前面



稲作前の整地作業

18,449,452回のクリック

皆さまのクリック数だけ、コスモ石油が
コスモ石油エコカード基金に寄付します。



「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトをひとつ選んでクリックすると、自動的にご本人に代わってコスモ石油がそのプロジェクトに1円を寄付する仕組みです。2006年度は6,115,554円のクリック数がありました。

※クリックされる方にお金はかかりません。
※1日1人1クリックのみ有効です。
※18,449,452回のクリック数は、2007年3月31日までの累計数です。

サイトリニューアル

「コスモ石油エコカード基金活動紹介」サイトが、
定期的にリニューアルされています。



2006年7月に「ずっと地球で暮らそう。」プロジェクトのサイトが「コスモ石油エコカード基金活動紹介」にリニューアルしましたが、2007年1月と4月にも内容を更新しました。2007年7月掲載中の葉っぱの写真は、学校の環境教育支援プロジェクトの写真です。

URL

<http://www2.cosmo-oil.co.jp/kankyo/charity/>

URL

<http://www.cosmo-oil.co.jp/kankyo/eco/index.html>



EE kids

子どもたちの問題意識や体験を発表し合う
ウェブサイト「EE kids」。



環境教育活動に取り組む学校やクラスがブログを開設し、学校の枠を越えて、子どもたちが環境学習に活用し、他の学校が取り組む活動を見たりするなど、たくさんの方々気軽に使えるようにしています。

URL

<http://eco.goo.ne.jp/education/eekids/>

TERRE

人の叡智を未来へとつなぐ
環境文化誌「TERRE」ご送付のご案内



コスモ石油は、深刻化する環境問題を前に、より真摯にかつ積極的に考え、情報を発信していくことが果たすべき役割であると自負し、環境文化誌『TERRE(テール)』を年3回発行しています。ご送付をご希望の方は、下記URLの申込みフォームまたは、ハガキにて下記へお申込みください。

URL <https://www.cosmo-oil.co.jp/terre/form.html>

宛先 〒105-8528 東京都港区芝浦一丁目1番1号東芝ビル
コスモ石油コーポレートコミュニケーション部広報室「TERRE」編集部

『コスモ石油エコカード基金』の 環境貢献活動について

ドイツ・ハイリゲンダムで開かれた先進国首脳会議（G8）が「2050年までに温暖化ガス排出量を半減させる」ことへの検討を合意し、新たな枠組み作りに入ったことから、地球環境汚染や温暖化防止をめぐる動きが急激に活発化してきています。コスモ石油は早くから地球環境問題に取り組む、先進的役割を果たしてきました。石油製品の生産と消費から生じる環境負荷の低減を謳った環境中期計画「ブア21」、連結中期経営計画とCSRの推進、また、コスモ石油エコカード基金によるパプアニューギニアやソロモン諸島における環境保全・開発支援等がそれです。

唐沢 敬

立命館大学名誉教授
東京国際大学国際教育プログラム顧問

筆者はかつてパプアニューギニアの「熱帯雨林保全プロジェクト」や定置型有機農法育成支援の現場を参観する機会を得ました。工業製品から日用品に至る必需品の大半を輸入に頼るパプアニューギニアの特殊な経済構造の中であって、畜産と稲作を結びつける有機農法は同国の国情と国民生活の要請に応えたものです。環境保全と経済・産業開発の課題を同時に追求するという意欲的な目標を持っているうえ、社員が現地へ赴いて指導することにパプアニューギニア政府や国民から高い評価が寄せられています。

この報告書は、コスモ石油提供で作成し、コスモ石油エコカード基金に寄せられた会員の皆さまの寄付金は使用していません。

制作

 **コスモ石油株式会社**

〒105-8528 東京都港区芝浦一丁目1番1号東芝ビル
TEL 03-3798-3134
<http://www.cosmo-oil.co.jp/>